

「教科又は教職に関する科目」, 教職教養課題特講

担当教員：山崎哲司・日野克博

## 「教職教養課題特講」担当の勧め

理科教育講座・山崎 哲司

「教職教養課題特講」は、2年次の学生を対象にした後期の授業科目であり、免許法上の「教科又は教職科目」となっている選択の科目である。「教職教養課題特講」として開講されていた科目を、平成17年度に3つに分けた中の1つであり、学校教育に関する課題を、実践講話を交えながら考える、という内容にしている。

私が全体のコーディネートをすることになったのは平成18年度からであり、今年で3年目となるが、毎年140～160名という大人数の受講生になっているのは、学校現場から多数の教員に来ていただいているためである。この3年間、同じような組み立てで授業を実施してきたが、今年度の実施内容と担当者を以下に示す。

第1回 ガイダンス 教員に求められる資質能力  
(山崎・日野)

第2回 問題設定と今日的課題 (日野・山崎)

第3回 学生ディスカッション (山崎・日野)

第4回 実践講話 松山市教委・稲田直行

第5回 実践講話 附属小学校・平尾真治

第6回 実践講話 附属小学校・今井政宏

第7回 実践講話 授業の鉄人 伊予市立中山  
小学校 渡部明代

第8回 実践講話 授業の鉄人 今治市立常磐  
小学校 村上圭司

第9回 実践講話 授業の鉄人 松山市立南中  
学校 山内 孔

第10回 学生ディスカッション (山崎)

第11回 実践講話 附属中学校・吉本浩司

第12回 実践講話 授業の鉄人 松山西中等教  
育学校 丸尾秀樹

第13回 実践講話 松山市教委・藤本昭二

第14回 学生ディスカッション (山崎・日野)

第15回 まとめ (山崎・日野)

“えひめ授業の鉄人”については、平成16年度からの3年間で終了しているが、前義務教育課長からは、その名称を使っても良いでしょう、というお言葉をいただいたと

いうことや分かりやすさという点から、そのまま今年度も名称を使用した。授業の初回には担当者未定の回も多くあるが、授業全体のおおよその流れを紹介すると、友達から聞いて面白そうだから、ということで受講者が2回目から増える、ということが起きている。その意味でも、受講者が多い理由は実践講話というものの魅力なのであろう。すなわち、担当者が交代しても問題はない科目であり、そろそろバトンタッチをしても良いと思われる。

そこでこの科目の実施にあたって行っていることを紹介しておく、まずは夏期休業期間に愛媛県教育委員会の義務教育課と高校教育課を訪れ、“えひめ授業の鉄人”などの優れた授業実践を行っている教員を派遣していただくことをお願いする。その後紹介をしていただいた学校へ連絡をして、講師予定者に直接お願いをする。その際に、授業の目的等を伝えて日程の調整をして行く。同時並行で附属小・中学校にも、講師の派遣をお願いする。とは言っても、なかなか手が回らずに遅れ気味になってしまいが、大学における実地指導講師の派遣依頼手続きも必要なので、下手をすると授業が成立しなくなる。忘れてはいけないが、松山市教育委員会にも、講師の選出をお願いすることが必要である。この一連の依頼が、最も重要なところかも知れない。最初に引き受けた平成18年度は、学校現場や教育委員会との接点がほとんどなかったので不安であったが、好意的に対応していただいた。私でもできたので、教育学部のどなたが引き継いでも大丈夫である。

さて、本題の授業内容と評価である。実践講話については何ら問題はないが(各回の評価については、実施責任者が行うため、常に授業に参加している)、他の回については私と日野准教授で話題の提供をしている。幸いにして教員養成系の全国集会など

に繰り返し参加しているので、その中で話題になること、「地域連携実習」などを通して伺っている教育現場の声、そして中教審の答申などにに基づき、教員になるために身につけてもらいたい能力、学力に関して課題とされている事柄などを紹介している。また、日野准教授が紹介するビデオ映像なども、学生に考えさせ、グループディスカッションを行う際のテーマに結びつける話題提供となっている。

グループディスカッションについては、クジを引いて5人ずつのグループを作ることになっている。大講義室で行っている授業であるが、2列の机で前後に2名・3名と座り、議論をする形にしている。150人前後という大人数であるが、多くのグループで活発な議論ができています。

最後の回に、次のようなアンケートを取った。

Q1 この授業で、教科指導力について知識・理解を深めることができた

Q2 教育現場の実践講話から、実践的な問題解決の方法を考えることができた

Q3 現在の教育課題について、実践的な自己教育課題を見いだすことができた

Q4 小グループでディスカッションの授業を3回行いました。今回の授業全体のなかで、小グループでのディスカッションの授業は、よかったですか

以上の4項目については、強くそう思う  
 そう思う    どちらでもない    あまり  
 思わない    そう思わない    の5段階で回答をしてもらった。そして5番目の問いは、

Q5 小グループで話し合った利点として、次に該当するものを選んでください(複数可)であり、選択するものとしては、

授業のアクセント    受講生同士や教員との双方向性    自分の知識の確認    教えあうことによる学びの向上    仲間意識の形成    授業への参加している意識の形成    とした。

回答者数：126名    (表内の数字は%)

	Q1	Q2	Q3	Q4
	28.6	29.4	19.8	9.5
	61.9	57.1	65.1	57.1
	8.7	12.7	14.3	25.4
	0.8	0.8	0.8	6.3
	0	0	0	1.6

Q5については、

30.2%	38.1%	38.1%	48.4%	15.1%	19.0%

Q1～Q3については、肯定的な意見が大半である。Q4についても と で2/3を占めるが、「どちらでもない」という意見も1/4となっている。Q5で と の回答が少なかったことから、短時間でのグループ作りが難しい、ということが、Q4における評価に結びついているのではないかと思われる。巡回しながら様子を見ているが、グループによっては話し合いが早めに終わったり、沈黙の時間が長かったり、ということが見られた。また、自由記述欄には、グループでの話し合いが苦手という記述もあった。

とは言え、いつも行動する仲間と話し合いを行うのでは、雑談になってしまいがちであり、またグループでの話し合いが苦手であっても、それを少しずつ改善して行く努力も必要であろう。話し合いの時間配分や話し合うテーマの設定には、まだまだ工夫が必要と自覚しているが、次にバトンタッチするまでの、あと1、2年、改善方法を考えて行きたい。

この形の授業は、全学的な教員養成カリキュラム改革の中で、他学部へも広げて行く予定である(他学部向けに独立させることも視野に入れている)。実践講話についての評価は高いが、それを各自の自己教育課題へと結びつけて行くか、Q3における

という回答が、Q1、Q2と比較した場合に低いということ踏まえながら、改善方法を検討したい。また一方で、いろいろな方に「教職教養課題特講」を担当していただき、実践講話をより活用する授業構築について、学部として経験を積み重ねるということも、よりよい授業を作っていくための手段ではないかと考える。来年度に向けて、本授業の改善を検討するが、もう一つには、そろそろ私たち二人から他の方へと、担当者の交代を考えるべき時期になったようである。